

日本認知言語学会第11回大会・ワークショップ
対比・非対称性・意味の拡張メカニズム

キーワード：意味拡張、意味変化、非対称性、身体性、視点、主観性、ダイクシス

1. はじめに

本ワークショップの目的は、英語、フランス語、日本語、中国語における反義性をなす言語表現に注目し、身体性を基盤とする非対称的な意味拡張や、主観性に裏づけられた意味変化の諸相を明らかにすることである。特に、環境に埋め込まれ、環境と相互作用する視点を持つ認知主体の様々な役割に注目し、言語の意味拡張を分析する。また、複数言語の表現を考察し、意味の拡張メカニズムの非対称性、普遍的な面と相対的な面を明らかにする。

2. 発表内容

第一発表： *dead* と *alive* を中心とした対比に関する強意語と完全性

第二発表： 反対概念の非対称性の普遍性と限界：日本語と中国語における〈上/下〉の非対称性を中心に

第三発表： 条件節を導く *under* について：文法化と身体性の観点から

第四発表： 日本語ダイクシスの歴史的形成と領域区分化

第五発表： ダイクシス動詞「行く」と「来る」の日仏対照

第一発表、第二発表、第三発表は、英語と中国語の反義性をなす言語表現の対における非対称的な意味拡張とその認知的な基盤を考察する。

第一発表では、*alive* ではなく *dead* が完全性を表す強意語になることに注目し、それが生死という矛盾関係の対比に動機づけられていることを指摘する。死は単なる否定的な有標状態ではなく、極限にある生命の完全な無であり、そのため程度の甚だしさだけでなく完全性を表す強意語になると考えられる。*dead* の対比を通し、程度の甚だしさと完全性の違いを対比の認知的性質という観点から明らかにする。

第二発表では、日中語における〈上/下〉の非対称性に注目する。認知意味論の視点から反対概念の非対称性の普遍性と限界を検討する。辞書とコーパスに基づき、語彙構成と意味の面から非対称現象を量的に記述し、日中両言語の共通点と相違点をまとめる。さらに、非対称現象の背後にある認知的モチベーションを探り、日中語に共通する普遍的な非対称性と、各言語で異なる相対的な非対称性を明らかにする。

第三発表では、*over* と *under* が示す非対称的な意味拡張に注目し、条件節を導く *under* の認知的な基盤を論じる。この *under* の用法には、「空間」から「支配」への意味拡張と、

内容語から機能語への移行という、二種類の言語変化が見られる。本研究では、*under*のみが条件節のマーカーへと拡張する点に注目し、この拡張は経験世界における人間と環境との相互作用に基づき生じる点を明らかにする。

第四発表と第五発表は、日本語とフランス語のダイクシス表現の意味変化のプロセスについて考察する。

第四発表では、日本語が自己の領域内の事物・事象と他者の領域内の事物・事象とを言語的に区別する方向に発達してきていることを実証する。たとえば、古代語では聞き手領域への話し手の移動を「来」で表していた。

(1) 「などかさてはものしたまふ。早う来や」といひたければ、「いま参り来む。この前裁の、いとおもしろく、くまぐましき、見るなり」といひてぞ、...

現代語では聞き手領域への移動は「行く」が担う。日本語は、話し手領域への移動と聞き手領域への移動を言語的に区別するようになった。同様の領域区分化のプロセスは、授与動詞、敬語動詞、指示詞などのダイクシス現象でも認められる。

第五発表では、日仏語のダイクシス動詞「行く」と「来る」の対照研究を通じて、主観性（主体性）との関係、特に「望ましき」の判断との関係を考察する。フランス語の助動詞 *aller* と *venir* には、話し手の判断を表す主観化した用法がある。同様に、日本語も「～の性格を強めていった」、「～が登場してきた」のような「ある種の過程」を表す「行く」「来る」の用法がある。主観性には、話し手の位置としての基準点の提示機能や話し手の視点のあり方（日本語＝状況密着的、英語＝状況外的）等が指摘されているが、事態への話し手の判断に関わる要素もあり、特に「望ましき」は重要な役割を果たすと考えられる。

3. おわりに：本ワークショップの意義

反義性をなす言語表現の対は、一見、対称的な意味拡張をなすように思われるが、それらは非対称的な意味拡張をなすことがある。本ワークショップにより、言語研究において「非対称性」が重要なキーワードとなり得ることが実証的に示される。また、歴史的観点からダイクシスを体系的に考察した研究や、「望ましき」という価値判断の観点からダイクシスにアプローチする研究はこれまでほとんどされていない。本ワークショップは従来のダイクシス研究に対して対比を基盤とした新たな知見をもたらす。

主要参考文献

- Akatsuka, Noriko. 1997. Negative conditionality, subjectification, and conditional reasoning. In Angeliki Athanasiadou and René Dirven (eds.) *On Conditionals Again: Current Issues in Linguistic Theory 143*, 323-355. Amsterdam: John Benjamins.
- 赤塚紀子・坪本篤朗. 1998. 『モダリティと発話行為』東京: 研究社出版.
- Bally, Charles. 1965[1932]. *Linguistique générale et linguistique française*. Berne: Edition Francke.
- Fauconnier, Gilles. 1997. *Mappings in thought and language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles J. 1966. Deictic categories in the semantics of 'come'. *Foundations of Language*. 2, 219-227.
- Fillmore, Charles. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Forest, Robert. 1993. «Aller» et l'empathie. *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*. LXXXVIII, fasc. 1, 1-24.
- Heine, Bernd. 1997. *Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 泉邦寿. 1978. 『フランス語を考える 20 章』. 東京: 白水社.
- Jing-Schumidt, Zhuo. 2007. Negativity bias in language: A cognitive-affective model of emotive intensifiers. *Cognitive Linguistics*, 18 (3): 417-443.
- 川口順二. 2006. 「モダリティ動詞 aller」 『藝文研究』. 慶應義塾大学藝文学会. No. 91-3, 328-310.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (『レトリックと人生』. 1980. 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳)、東京: 大修館書店) .
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image and Symbol*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference point constructions, *Cognitive Linguistics*, 4 (1):

- Levinson, Stephen C. 2004. Deixis. In Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. 97-121. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.
- Lyons, John. 1982. Deixis and subjectivity: Loquor, ergo sum? In Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.) *Speech, Place, and Action*, 101-124. Chichester: John Wiley & Sons Ltd.
- 沈家煊. 1999. 《不对称与标记论》.南昌:江西教育出版社.
- 太田ふみ野. 2009. 「前置詞の非空間的意味の動機づけに関する認知言語学的考察 –円直性を表す前置詞の *over* と *under* の比較を中心に–」 修士論文, 京都大学.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language*, 65 (1): 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in grammaticalisation. In Dieter Stein & Susan Wright (ed.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2006. The semantic development of scalar focus modifiers. In Ans can Kemenade and Bettelou Los (eds.) *The Handbook of the History of English*, 335-359. Oxford: Blackwell.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 王祥荣. 2000. 《儿童语言中的“上”、“下”类方位词》.安徽师范大学学报 (4):568-573.
- 张敏. 1998. 《认知语言学与汉语名词短语》.北京:中国社会科学出版社.